

2-9.二俣地域の営みにみる歴史的風致

(1)はじめに

二俣地域は、天竜川下流域の扇状地の起点、天竜川中流域の山地と溪谷が連続した地形の終点に位置している。この立地特性により、東西及び南北から連絡する陸路(街道)と南北を連絡する水路(河川舟運)の両方が二俣地域で結節している。

二俣地域は南側の平野部と北側の山間部の結節点に位置し、交易や戦略上、古くから重視されていた。このことは、古代には市内で最大の前方後円墳が築かれ、戦国時代には有力武将がこの地を巡って攻防戦を繰り広げたことからわかる。また、江戸時代の国学者内山真龍の著した『遠江国風土記伝』によると、かつて二俣郷といわれていたところは、現在の二俣地域だけではなく、大谷や鹿島、山東といった周囲の地域まで含む広範囲な地域を指していた。

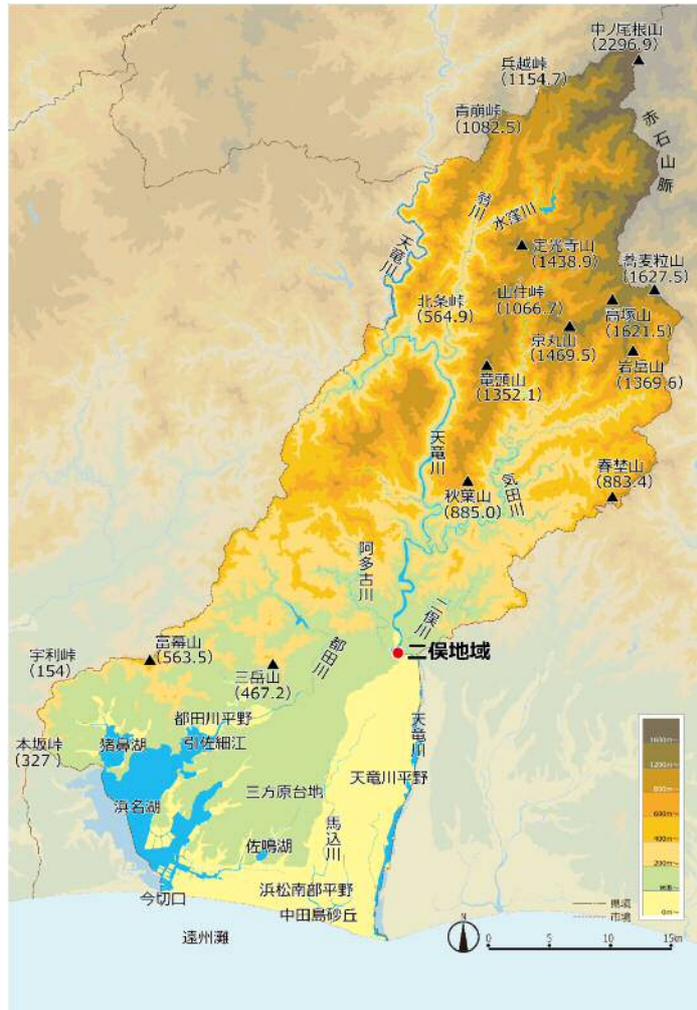


図2-9-1 二俣地域の位置

(2)二俣地域の歴史

二俣地域は天竜川本流と北東から流れる二俣川の合流地点にあたる。現在、水系としては天竜川と別にされている馬込川も、江戸時代以前は天竜川の一流路であり扇状地を縦横に流れた流路の名残といえる。この古い天竜川の流路は、江戸時代以前には本流であった時代があり、この当時の二俣地域は東海道沿いの都市である浜松宿(中世では引間宿)や、姫街道(古代の浜名湖北回り東海道)の気賀宿、有玉幡屋といった宿場や市場と天竜川の水運で直接結ばれ、さらに河口近くの内水面にあった湊(白羽や田尻などの地名にあたる場所、掛塚もその一つ)からも船を乗り換えて物資が運ばれていた。二俣地域から上流の天竜川の本支流にも川湊(河岸)が設けられており、早くから森林資源、ついで鉱石、繭(生糸)などの物流の中継地

点であった。また二俣地域は東海道や姫街道筋から分岐し秋葉山へ続く秋葉街道の中継地でもあり、戦略上の拠点として戦国期には城が築かれ、城下町として発展した。東・西・南方から延びる複数の道がこの地を行き交い、甲子講で人々を集めた光明山(光明寺)や秋葉信仰の秋葉山へ向かう人々もこの地を経由した。交易上の繁栄をもたらしてきた天竜川と二俣川は、同時にたびたび水害をもたらしてきたが、この地域の住民はその都度、流路の付け替えや堤防の工事などで克服し、川の恵みと恐ろしさに畏敬の念を持ちながらも川と共存・共栄してきた。このような地域の営みは『遠江国風土記伝』に書かれ当時の様子を知ることができる。

近代以降も二俣地域は東海道を補完する交通網における拠点となり、昭和15年には掛川駅(掛川市)～新所原駅(湖西市)を結ぶ国鉄二俣線(現天竜浜名湖鉄道 天竜浜名湖線)全線が開通した。二俣には遠江二俣駅(現天竜二俣駅)が拠点駅としておかれ、機関区や車庫が整備された。また、西鹿島駅では、遠州鉄道を介して新浜松駅とも結ばれている。この地は、東西及び南北(浜松市街地～秋葉山)の交通拠点として機能してきた歴史をもっている。交通・交易の拠点として古くから発展してきたこの地では、地域で続く祭礼も市内中心部の祭りより歴史が長く、その誇りを地域住民から感じられ、街道・舟運を利用してきた人々との交流の営みの歴史もそのなかに感じることができる。



図2-9-2 近世の街道と二俣地域の位置



図2-9-3 現在の二俣地域(手前は天竜川)

(3)二侯城と旧城下町にみる歴史的風致

①二侯城と城下町について

二侯地域の象徴である二侯城^{ふたまたじょう}は、元は城下町北部にあった笹岡城^{ささおかじょう}(二侯古城)が戦略上の理由から現在の二侯城跡に移ったとされ、のちに南向かいの鳥羽山城^{とばやまじょう}が築かれると、対で一つの城の機能を備えた別城一郭^{べつじょういっかく}とよばれる特徴を持つようになる。城下町はこの三城に囲まれた地域を中心に形成された。

戦国時代には徳川軍と武田軍が攻防戦を繰り広げた二侯城であったが、江戸時代初期には廃城となり城下町は旧城下町となった。また、二侯城は徳川家康の長男である信康^{のぶやす}が自刃した場所でもあり、旧城下町では信康をしのぶ^{のぶやす}営みが続けられている。

旧城下町は秋葉山や信州、奥三河の鳳来寺、浜松、見付(磐田市)へとも繋がる秋葉街道が結節する場所にもあたり、その立地から古代からの交通・交易の中心として経済的な繁栄が長く続いてきた。このため二侯の町には、江戸時代以前からの社寺から、近代建築の蔵、洋館、看板建築など、様々な時代の建築物が混在するレトロでユニークなまち並みを楽しむことができる。このまち並みを舞台に150年以上続く二侯まつりでは、屋台と背景となるまち並みが一体となって二侯の地域を彩っている。

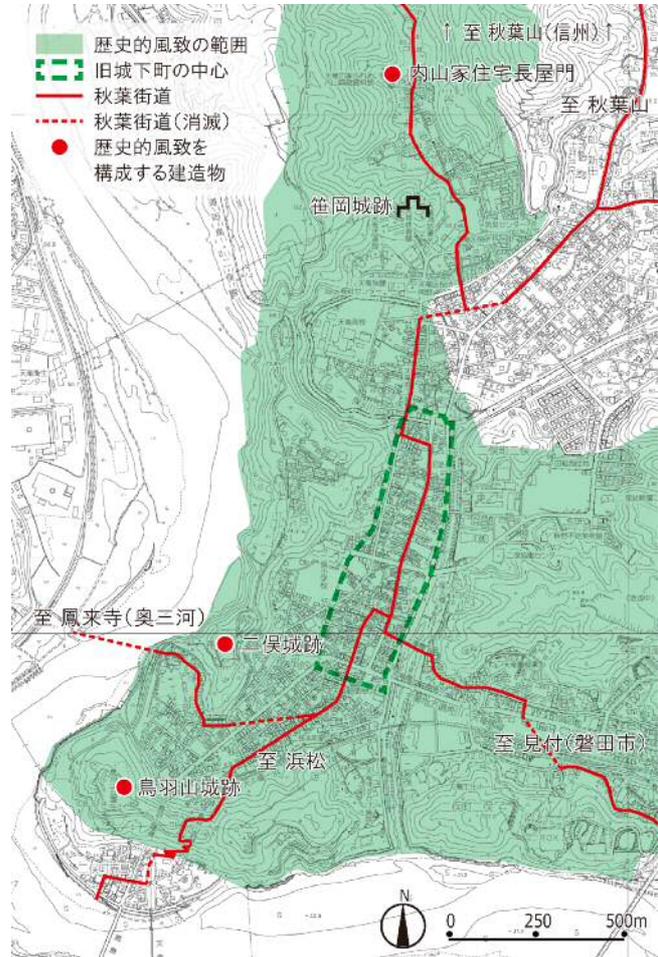


図2-9-4 二侯地域の城跡と旧城下町の範囲

②二侯城と周辺部の建造物

A.二侯城跡及び鳥羽山城跡

二侯城跡及び鳥羽山城跡は、浜松市天竜区二侯町二侯に所在する戦国時代の山城であり、平成30年(2019)2月に国の史跡として指定された。両城は、天竜川が下流平野に移行する最南端部に構築され、別城一郭^{べつじょういっかく}と呼ばれる相互補完的な関係をもっている。元龜3年(1572)から天正3年(1575)のあいだに繰り広げられた徳川家康と武田信玄・勝頼の攻防の舞台として著名であるばかりでなく、天正18年(1590)の家康の関東移封後、堀尾氏^{ほりおよしはる}(堀尾吉晴・堀尾宗光^{ほりおむねみつ})が築いた野面積みの石垣^{のづらづ}を良好な状態で見ることができる。

二俣城には深い堀や天守が備えられるなど要塞化が進められたことに対し、鳥羽山城には枯山水庭園や破格の大きさの大手道など迎賓館的な性格を見ることができる。また、二俣城跡からは城下町の二俣地区と大谷地区を、鳥羽山城跡からは鹿島地区を望むことができる。両城については正確な築城年は不明ながら、正徳2年(1712)までに作成された「清瀧寺寺領絵図」には廃城後の二俣城天守台石垣が描かれ、鳥羽山城については寛政11年(1799)に完成した『遠江国風土記伝』所収の二俣城跡自古町望図で、二俣城の「郭」と記されている。



図2-9-5 二俣城跡及び鳥羽山城跡の指定範囲



図2-9-6 清瀧寺寺領絵図



図2-9-7 二俣城跡自古町望図

ふたまたじょうあと
a. 二侯城跡

二侯城跡は南北 300 メートル、東西 250 メートルの規模で、堀切や塹堀がみられ、北の丸、本丸、二の丸、南の丸 I、同 II、西の丸 I、同 II などの廓から成る。築城時期は定かではないが、『二侯城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書(2017)』によると、永禄 3 年(1560)に起こった桶狭間の戦いを契機に、今川氏の勢力下にあった松井宗恒が整備を進め、大規模な堀は徳川氏と武田氏の攻防の舞台となったころ(1572~1575)に設けられたものと考えられている。本丸を中心に石垣がみられ、西側中央部に天守台が構築されている。西の丸 I の南側と西側においても良好な形で石垣の遺存が確認され、南側の石垣は高さ 5.6 メートルに及んでいる。これらはいずれも豊臣政権下の堀尾氏によるものと考えられている。関ヶ原の戦い以降、17 世紀初頭には二侯城の戦略拠点としての役割は失われ、二侯城跡から出土する遺物の年代からも、遅くとも元和元年(1615)の一国一城令までには廃城になっていたと考えられている。



図2-9-8 二侯城跡遺構図



図2-9-9 二侯城天守台跡

とばやまじょうあと
b. 鳥羽山城跡

鳥羽山城については江戸時代初期に書かれた『三河物語』から家康が武田氏から二侯城を奪還するために本陣を置いた場所とみられている。城跡は二侯城跡の南の南北 350 メートル、東西 1,000 メートルほどの独立丘陵上に立地し、山頂部分を中心に東群・中央群・西群の 3 つにそれぞれ城郭遺構が存在している。本丸には土塁が良好に遺存していて、南側に大手門、北側に搦手門、東側に東門があり、西側の土塁には鉢巻石垣と腰巻石垣が上下 2 段にわたって構築されている。『二侯城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書(2017)』によるとこれらの石垣は堀尾氏によって 1590~1600 年ごろに構築されたものと考えられており、本丸の発掘調査では枯山水の庭園

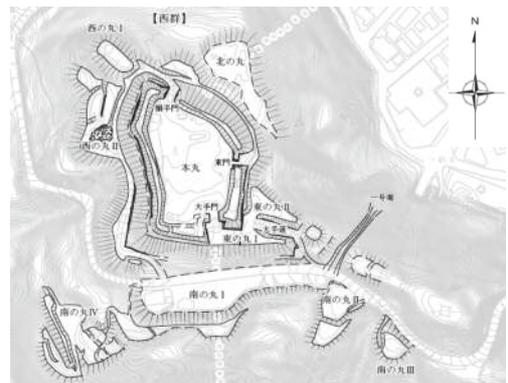


図2-9-10 鳥羽山城跡遺構図(本丸周辺)



図2-9-11 鳥羽山城跡大手道

や礎石建造物が検出され、大手(正面側)の調査では最大幅9メートルに及ぶ大規模な道が造成されていることが明らかとなった。南方に展開する浜松平野の眺望、開放的な大手道や庭園の存在など、鳥羽山城跡は居館としての性格を有する城郭と考えられている。

イ.清瀧寺

京都知恩院の末寺、本尊は阿弥陀如来。徳川家康の長男信康の菩提寺。本堂には安政4年(1857)造彫の家康木像や、信康の位牌が安置され、境内には信康廟がある。応永13年(1406)の創建で、現在の本堂は大正4年(1915)の再建とされ、同年の落慶式の写真が本堂内に残されている。天正7年(1579)、織田信長の嫌疑にかけられた徳川家康の長男・信康は二俣城内で自刃し、遺骸はこの地にあった草庵に埋葬された。天正9年(1581)に家康が来臨し、清水の湧き出るのを見て、寺名を清瀧寺と名付け、信康を清瀧寺殿の諡とした。山門の手前には武田軍が筏を流して破壊したとされる二俣城の井戸櫓(原位置は不明)が模擬再現されている。二俣城跡にほど近く、山門から境内を通り南西への山道を辿っていくと二俣城跡へ抜けていくことができる。



図2-9-12 清瀧寺



図2-9-13 井戸櫓

ウ.信康廟

清瀧寺境内にある家康の長男信康の廟所。敷地の南西側にあり、二俣城跡から清瀧寺へ続く道の脇から奥に進んだ位置にある。清瀧寺文書によると明和8年(1771)に建てられたとされる。現在の廟所は明治30年(1897)前後に改修され、改修時に久能山東照宮(静岡市)と徳川宗家からの寄付を記した札が残されている。廟所は手前に三つ葉葵紋の入った切妻造の朱門がある。その奥に1.82メートル四方の切妻造平入棧瓦葺の廟があり、廟内には信康の墓である五輪塔が安置されている。普段は手前の門扉で施錠され立ち入りが制限されているが、廟所内には信康の墓以外に、殉死した吉良於初、当時二俣城主であった大久保忠世、三方原で戦死した中根正照、青木吉継の墓が朱門を入った右手に並んでいる。



図2-9-14 信康廟(朱門)



図2-9-15 信康廟内の墓

③旧城下町の建造物

ア.諏訪神社

清瀧寺せいりゅうじの北側に鎮座している。宝暦 9 年(1759)に諏訪大明神を城下町の中心付近(現在の大明神)から現在の地に遷座したとされ、神社の修復時期を示す棟札 4 枚が残されている。現在の社殿は明治 28 年(1895)再建され、321 坪の境内に本殿おおいどのと覆殿並びに拝殿が建っている。二俣地区の氏神であり、昭和 30 年ごろの例祭時に現在と同じ社殿を背景にした写真が残っている。



図2-9-16 諏訪神社

イ.大明神

現在は諏訪神社例祭おたびしよの御旅所となっている。諏訪神社の移転後しばらくは下諏訪大明神(移転後の諏訪神社は上諏訪大明神)と呼ばれていたが、明治初期に一度払い下げられてなくなり、明治 24 年(1891)に再建された。棟札によると現在の建物は昭和 33 年(1958)に修復を受けている。



図2-9-17 大明神

ウ.旧二俣町役場

旧二俣町役場は大正 13 年(1924)に東宮みこのみや殿下(後の昭和天皇)御成婚記念事業として庁舎の建て替えが計画されたが、財政事情が悪かったため延期となり、昭和 8 年(1933)の景気回復を受け昭和 10 年(1935)12 月に着工、翌年の 3 月に上棟、そして 8 月 5 日に竣工した。

木造 2 階建、寄棟造棧瓦葺母屋に独立柱を立てたやや背の高いポーチが付いており、外壁はモルタル塗りにスクラッチタイルが張られている洋式建築で、細部の意匠にもこだわりを感じることができる。平成 15 年(2003)には国の登録有形文化財として昭和 11 年(1936)完成で登録され、現在は本田宗一郎ものづくり伝承館すわじんじゃとして利用されている。建物の前庭は諏訪神社の境内につながっており、平成 4 年(1992)にお祭り広場として整備されている。



図2-9-18 旧二俣町役場

エ.ヤマタケの蔵

新蔵、南の蔵、北の蔵からなり、3棟が中庭を挟みコの字形に配置されている。3棟とも国の登録有形文化財となっており、新蔵は大正12年(1923)、南の蔵は大正期、北の蔵は明治前期として登録されている。旧所有者の内山家の屋号からヤマタケの蔵と呼ばれている。敷地西奥の新蔵は自然石を礎石とした木骨煉瓦造2階建、切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺^{さんがわらぶき}の座敷蔵、南の蔵は煉瓦造平屋建、外壁南面にイギリス積煉瓦壁を現し、使用人部屋などがある。北の蔵は西側が土蔵造2階建、東端が一段低くなる落ち棟の平屋建となった切妻造棧瓦葺で、外壁・鉢巻^{しっくい}は漆喰塗、西妻面はモルタル塗の下屋を張出し、新蔵同様の外観となっている。ヤマタケの蔵は建物収蔵機能だけでなく、居住用の座敷蔵としての機能を有していた。道路側(東側)には蔵造をイメージした交流棟が建設されている。



図2-9-19 ヤマタケの蔵

オ.明治牛乳天竜販売所

木造平屋建、外壁にスクラッチタイル張り、縦長の回転ランマ付き上げ下げ窓が6つ並んで付けられている。施工書類によると昭和11年(1936)の竣工で、設計者が旧二俣町役場と同一であるため同じ外観を持つ。屋根は看板を兼ねた鉄板一文字葺きで5年ごとに塗装している。昭和初期のスクラッチタイルを残す貴重な建築物。



図2-9-20 明治牛乳天竜販売所

カ.旧米徳酒店

木造2階建、日本家屋の瓦屋根を平坦な壁で隠し、屋号や商品名を掲げる看板として利用する独特の建築様式(看板建築)の建物で、昭和の香りを色濃く残している。『活力ある二俣再生プロジェクト報告書(2009)』(平成20年度地方の元気再生事業(国土交通省 中部地方整備局)・二俣みがきの会)によると、竣工は明治末ごろと推定され、昭和22年(1947)の道路拡幅時に現在の位置に曳家された。2階の外壁には、商品であるウイスキーを製造したオーク樽を加工した木板材が張られ、“オーシャンウイスキー”の懐かしい文字と共に独特の雰囲気醸し出している。



図2-9-21 旧米徳酒店

キ.二俣医院

医院建築の建物。二俣地域が大正から昭和初期にかけて繭の集積地として栄えた時代を象徴する洋館で、大正 5 年(1916)上棟の棟札が小屋裏に残されている。基礎はレンガ造で、独立柱の車寄せを持つ。寄せ棟造和型瓦葺きの屋根に、外壁は杉下見板ペンキ塗り、付け柱と窓枠をチョコレート色に塗装している。2階は畳の上に布団敷きの病室だったが、現在は使われていない。



図2-9-22 二俣医院(正面)

ク.旧陣屋旅館

^{ふたまた}二俣まつりで神輿の巡行ルート沿いに残る、独特の旅館建築の建物である。『活力ある二俣再生プロジェクト報告書(2009)』によると竣工は昭和初期、二俣地域に現存する唯一の木造 3 階建の旅館建築で昭和 20 年代後半に料亭(福田屋)から旅館となり平成 12 年(2000)まで営業していた。旅館となる以前の料亭の雰囲気も残る。屋根は入母屋造日本瓦葺き、1階のやや北寄りに破風屋根の玄関がある。道路拡幅前は前庭があった。



図2-9-23 旧陣屋旅館

ケ.内山家住宅長屋門

『遠江国風土記伝』を著した国学者^{うちやま またつ}内山真龍生家の長屋門。市指定文化財で、正確な建築時期は判らないが、享保 10(1725)年 7 月吉日の祈禱札^{きとうふだ}が残されていることから、このときに建てられたものと推測される。棧瓦葺の屋根に腰板と漆喰塗の壁の長屋門は、自然石の基壇上に建てられており、間口は 10 メートルある。^{うちやま またつ}内山真龍は遠江国豊田郡大谷村(現在の天竜区大谷)の名主であり、賀茂真淵門下の国学者として有名。^{うちやま またつ}内山真龍の業績を広く知らせるため、門の先にある生家跡には^{うちやま またつ}内山真龍資料館が建設されている。旧城下町の北端に所在する。



図2-9-24 内山家住宅長屋門

コ.天竜浜名湖鉄道 天竜二俣駅施設

昭和 15 年(1940)国鉄二俣線の全線開通にあわせて建設された鉄道施設である天竜浜名湖鉄道天竜二俣駅は、天竜二俣駅(本屋)、旧機関区(機関車転車台・機関車扇形車庫)など、駅施設 10 件が国の登録有形文化財として昭和 15 年(1940)完成で登録されている。昭和ノスタルジックな施設として観光客を受け入れ、昭和の鉄道遺産として駅施設の見学会と鉄道歴史館の公開を行っている。二俣まつりの屋台引き回しでは東南の折り返し地点にあたる。

a.天竜二俣駅(本屋)

木造平屋建、切妻造、棧瓦葺の本屋が北面する。外壁は縦板張りで、背面には屋根を葺き下ろしており、かつては乗車場上屋に使用されていたと思われる。駅務室の出札窓口が広い待合室に突き出し、待合室の天井は船底天井に造られ開放感に溢れている。平成23年(2011)1月に国の登録有形文化財となった。



図2-9-25 天竜二俣駅(本屋)

b.旧機関区(機関車転車台・機関車扇形車庫)

駅構内奥には旧機関区(現運転区)があり全国的にも貴重な鉄道の歴史遺産となっている。機関車転車台は蒸気機関車の進行方向を転換させるためのもので、鉄製で直径18メートルに及ぶ。現在は電動により回転するが、建設当時は手動で回転させていた。蒸気機関車が運行されていた当時は他の駅にもあったが、現在は天竜二俣駅にのみ残されている。機関車扇形車庫は木造平屋建、波形ストレート鉄板葺で建築



図2-9-26 天竜二俣駅旧機関区(現運転区)
(手前:転車台、奥:扇形車庫)

面積は686平方メートル。建設当時は6線分の格納が可能であったが、転車台から見て右側の2線分が切り縮められている。総木造で庫内に下る柱を少なくするために力強い架構を持っている。ともに平成10年(1998)12月に国の登録有形文化財となった。

表2-9-1 天竜浜名湖鉄道天竜二俣駅施設 国の登録有形文化財(一覧)

	建造物名称	概要
1	天竜浜名湖鉄道 天竜二俣駅本屋	(再掲)
2	天竜浜名湖鉄道 機関車扇形車庫	(再掲)
3	天竜浜名湖鉄道 機関車転車台	(再掲)
4	天竜浜名湖鉄道 天竜二俣駅上り上屋及びプラットホーム	木造平屋建、切妻造、波形鉄板葺。柱2本の上部に、挟み梁、頼杖、登り梁などでトラスを形成して屋根を受けている。
5	天竜浜名湖鉄道 天竜二俣駅下り上屋及びプラットホーム	
6	天竜浜名湖鉄道 運転区高架貯水槽	鉄筋コンクリート造、6本の脚の上に内容量70トンの貯水槽が載る。
7	天竜浜名湖鉄道 運転区揚水機室	木造平屋建、切妻造、縦板壁で、北面に出入口、南・西面に大きく窓を開けた建築。
8	天竜浜名湖鉄道 運転区事務室	木造平屋建で一部が2階建、屋根は葺土の上に棧瓦葺き。外壁は杉板縦張り。
9	天竜浜名湖鉄道 運転区休憩所	事務室棟の背面に浴場と並んで建ち、事務室棟との間に屋根を渡してつないでいる。
10	天竜浜名湖鉄道 運転区浴場	木造平屋建、日本瓦葺で事務室棟に沿って並んでいる。

④旧城下町にみる営み

ア. 清瀧寺での慰霊法要と信康まつり

二俣地域では二俣城で自刃した信康をしのび、顕彰する活動が続けられている。信康廟のある清瀧寺では、7月のお盆前と信康の命日である9月15日が近づく頃に清瀧寺の檀家によって境内と墓所、信康廟周りの清掃が行われ、命日には、信康の会による慰霊法要が行われている。

信康の会は平成21年6月に発足し、現在の会員数は100人以上となっている。法要では清瀧寺の本堂に信康の位牌が置かれ、住職の読経が本堂に響く中、信康の会の会員が参列し静かに焼香をすませていく。慰霊法要はそれまで清瀧寺で毎年行われていた回忌法要を平成21年から信康の会が主催する形で始まり、443回忌となる令和3年の慰霊法要も、社会情勢を受けて少人数ながら執り行われていた。

信康の会では5月の総会と9月の慰霊法要のほか、会報の発行、近隣の二俣小学校児童を招いて行う清瀧寺境内のみかん収穫時に信康の生涯を後世に伝えるため語り聞かせを行っている。信康の会以前にも、信康の顕彰を目的とした会が存在(現在は解散)しており、清瀧寺本堂に活動記録の一部が残されている。

このように信康をしのぶ活動は地域で続けられてきたが、昭和36年(1961)には信康を顕彰する活動を地域全体に広げようとの機運から第1回信康まつりが行われ、開催を重ねている。当初は9月の法要に合わせて行われていたが、旧天竜市観光協会が昭和43年(1968)に発行したパンフレットによると、旧天竜市の市政10周年を記念してこの年から11月に開催されるようになった。まつりでは信康廟での供養を済ませたあと、信康を中心とした武者行列が組まれ、旧城下町である二俣のまちを歩く。二俣城への大手道(推定)付近を出発し、中心街であるクローバー通りを武者の行列で盛り上げる。現在は天竜産業観光まつりの一部として、市民参加型の地域の一大イベントとなっており、クローバー通りを中心に中心街が祭り会場となって終日賑わいをみせている。



図2-9-27 信康の会による慰霊法要



図2-9-28 信康まつり(武者行列)



図2-9-29 信康まつりパンフレット (昭和43年(1968))

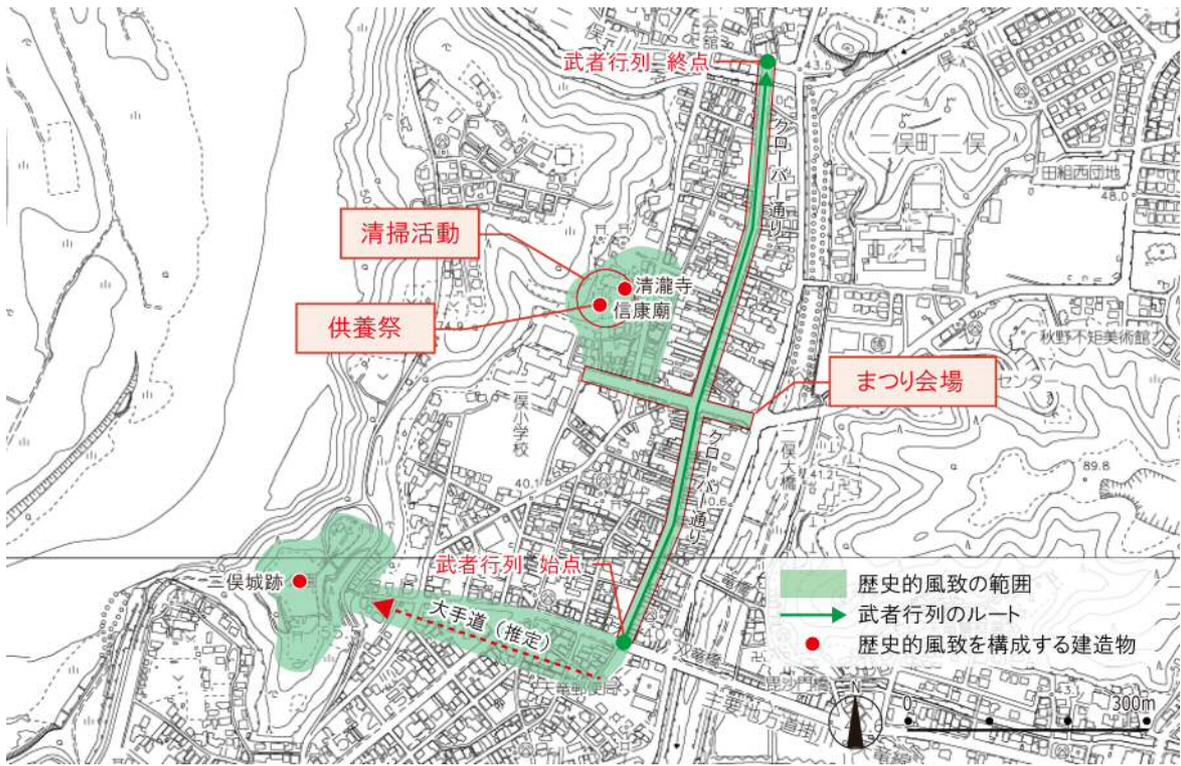


図2-9-30 信康の顕彰活動

イ. 二俣まつり(諏訪神社祭典)

二俣地区の氏神、諏訪神社の例祭。古くは上諏訪大明神と呼ばれていた現在の諏訪神社から、同じく下諏訪大明神と呼ばれていた現在の大明神まで、神輿の渡御とともに地区内各町の屋台が引き回される二俣地区最大のまつりとなっている。まつりの開始や屋台の登場は有名になった浜松まつりよりも開始はずっと古く、住民の誇りとなっている。二俣まつりについては、平成4年(1992)に発行された記念誌『壬生の郷 二俣まつり』に地域の歴史から組織、屋台、お囃子、まつりの決まり事まで詳細に記載されている。この記念誌は地域の古文書などから丁寧にまとめられ、社寺名や地名、歴史の記載については内山真龍の著書である『遠江国風土記伝』の二俣に関する項目により充実した内容となっている。この『遠江国風土記伝』は長屋門が残る生家跡に建てられた内山真龍資料館に保管されている。内山真龍資料館では城下町であった二俣地区の歴史を紹介し今に伝えている。

二俣まつりのはじまりはいつの時代か定かではないが、明治19年(1886)に県に出された旧祭式再興願のなかには「口伝では天和元年(1681)に神輿渡御が始まったと伝えられている」とあり、屋台の登場については地域の古文書(田光甚八附込日記)の慶応元年(1865)9月の記事に屋台についての記述があるため、このころには二俣まつりの形態となっていたと考えられている。祭りでは現在13台の屋台が諏訪神社氏子居住域(祭典参加町域)を引き回される。

まつりは元は8月31日夜～9月2日にかけて行われ、明治19年(1886)から9月5日～7日となった。しかし、毎年祭り当日になると決まったように雨が降り、ときには暴風雨で屋台が吹き倒されるなどで「二俣の雨祭り」とまで言われるようになったため、児童の夏休みや鹿島の花火を考慮して大正3年(1914)に8月21日～23日に変更され、現在は8月21日に近い金、土、日曜日に行われている。

ア. 二俣まつりの運営

二俣まつりは参加各町が1年ごとに輪番で年番町となる「年番制度」によって運営されている。年番町の役目が回ってくると、まつり全体の運営を一手に引き受け、町の名誉をかけて祭典運営にあたる。運営の成果をあげるため、前年から準備に入り様々な仕事をこなす。

まつりで参加各町は「連」と呼ばれ、連は若手の社会人である「若連」によって組織され、各町での様々な役割を担う。また、まつりの開催にあたっては、年番

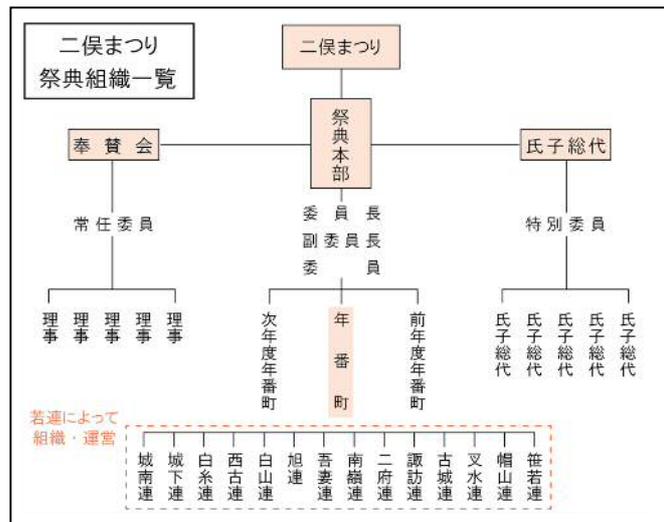


図2-9-31 二俣まつりの祭典組織

町を中心に宮司、氏子総代、奉賛会長、警察署長などが出席して行う「祭典連合会」で祭典

の日取り、屋台の運行など諸要件を決定している。

表2-9-2 連の構成

連	町	屋台
まさわか 笹若連	笹岡	一層唐破風、四輪内車
ぼさん 帽山連(※1)	車道	一層唐破風、四輪内車
こじょう 古城連	仲町	一層唐破風、四輪内車
すわ 諏訪連	諏訪町	一層唐破風、四輪内車
にふ 二府連	神明町	一層唐破風、四輪内車
なん 南ガク連(※2)	新町	一層唐破風、四輪内車
あづま 吾妻連	吾妻町	一層唐破風、四輪内車
あさひ 旭連	旭町	一層出組唐破風、四輪前輪内車、後輪外車
はくさん 白山連	阿蔵	一層唐破風、四輪内車
にしふる 西古連	西古町	一層唐破風、四輪内車
しらいと 白糸連	本町	一層唐破風、四輪内車
しろした 城下連	城下	一層唐破風、四輪内車
じょうなん 城南連	川口	一層唐破風、四輪内車
さすい 又水連(※3) 休止中	横町	二層桃山式破風、四輪前輪操舵式内車、後輪外車

※1 正しくは帽の目の部分が月

※2 ガクの字は山かんむりに類

※3 平成 25 年(2013)まで又水連(横町)の屋台を含めて 14 台であったが、現在、又水連は屋台の引き回しを休止している。



図2-9-32 二俣まつり屋台

b.祭りの様子

■祭り初日

諏訪神社境内で「夕祭」の神事が午後7時から執り行われ、二俣まつりがはじまる。町内ごとに所有する屋台の引き回しが始まるとお囃子が聞こえてくるようになり、このお囃子の笛の音は旧城下町を囲む二俣城跡や鳥羽山城跡、隣接した山間の^{おおや}大谷地域ある内山家住宅長屋門の付近まで聞こえ、二俣まつりを心待ちにしていた人々を高揚させていく。この音の広がりとともに、周囲を含むまち全体が祭りの雰囲気につつまれ夜が更けていく。翌日以降にはこの大谷や鹿島といった旧城下町周辺の地域からも多くの人々が祭りを楽しみに出かけていく。

■祭り2日目

午前中、9時ごろから各町で自町内の屋台引き回しが始められ、二俣のメインストリートであるクローバー通りに入ってくる。一方、諏訪神社境内では^{すわじんじゃ}宮司や氏子総代、各町の^{はくちょう}白丁（白装束で神事に参列する若手氏子）が集まって「本祭」の神事がはじまり、浦安の舞が奉納される。屋台が決められた順で神社に入りはじめると、二俣町役場前のお祭り広場が盛り上がり始める。13台全ての屋台が勢揃いすると境内には熱気が溢れ、いよいよ祭り本番の雰囲気となる。

昼過ぎに御神体を神輿に乗せる儀式が終わるといよいよ神輿の渡御が開始となる。待ちに待った出発に先駆屋台の引き手が走り出し、重い屋台に勢いをつけて広場から飛び出して行く。共に屋台を引く女性も子供たちも必死に走る様子に歓声が上がると、続いて神官に前後を挟まれた神輿が動き出す。神輿の周囲は^{はくちょう}白丁が囲み、一転して厳かな行列が行く。そのうしろを^{はくちょう}残りの12屋台が随行し、「ヨイショー」の掛け声とともに再び周囲を盛り上げていく。先駆屋台は途中で入れ替わりながら二俣の市街地を引き回される。



図2-9-33 諏訪神社境内での神事(本祭)



図2-9-34 お祭り広場を出る屋台



図2-9-35 神輿渡御

境内を東方向に出た神輿と屋台の行列は、旧城下町のメインストリートであるクローバー通りに出て北上し、ヤマタケの蔵を過ぎて明治牛乳天竜販売所の見える角の手前を左折して秋葉神社へ向かう。秋葉神社の手前で屋台を停留させると、神輿のみ秋葉神社に入り御幸所で「御旅所祭」が執り行われる。秋葉神社は二俣城下町に火事が多く、秋葉山への信仰が厚かったことから分祀されてきた。

秋葉神社を出ると再び先駆屋台が立ち、今度は6連の屋台が続きそのあとに神輿が行く。残り6連の屋台は随行せずそのまま待機し、時間をおいて引き回しを開始し、二手に分かれて二俣城下をくまなく引き回される。神輿はクローバー通りを南下して二俣医院、旧陣屋旅館、旧米徳酒店などの大正～昭和の香りを残すまち並みを通過していく。二俣川の上竜橋を渡って東を目指すが、ここで国道を通過するため屋台の横断待ちが発生する。この時間、後続の屋台は祭を盛り上げるため、クローバー通り中央部の交差点で四方の道路に展開し、交差点中央で屋台の接近することを繰り返す屋台合わせを行う。

運行ルートの上流に位置する天竜二俣駅の前を過ぎて反転し、駅前のロータリーに入って休憩をとる。休憩後の神輿は西へ向かい、鳥羽山城跡と向かい合う二俣城跡の麓を渡御して御旅所へ向かう。二俣のまちを渡御し、御旅所である大明神に神輿と随行した屋台が先に入ると、沿道に並ぶ露店からの香りにも包まれて祭りの熱気は最高潮に達する。後を追って残りの屋台が合流し、再び13屋台が集結すると渡御が終了する。その後、しばしの小休止をはさみ、それぞれの町内へ屋台が帰っていく。このことを大明神引き別れと呼ぶが、熱気で興奮した引き手たちにより大明神は二日目最後の盛り上がりを見せる。それぞれの屋台が町内に戻ると、随時町内への引き回しに出てゆく。



図2-9-36 街中を引き回される屋台



図2-9-37 旧陣屋旅館の前を通過する屋台



図2-9-38 旧米徳酒店の前を通過する屋台



図2-9-39 二俣川を渡る屋台



図2-9-40 屋台合わせの様子

■祭り3日目

前夜、神輿を守った屋台は早朝のうちに町内引き回しを終えて再び大明神に入って待機しており、続いて各町の屋台が午前中のあいだに集結してくる。この間午前 10 時から大明神内では「御旅所祭」が行われる。

午後 1 時になると先駆屋台が立ち、続いて神輿、残り 12 屋台の順に並び還御が始まる。還御でも先駆屋台が入れ替わりながら引き回され、前日同様途中で二手に分かれる。午後 2 時を少し過ぎたころ、神輿が諏訪神社に還御し神輿から御神体を社殿に還す「還御祭」が行われる。二手に分かれ諏訪神社前で合流した屋台がほぼ交互に諏訪神社入りしていく。諏訪神社入りには相当の時間を要するため、後続の屋台は待機しながら二俣まつりの屋台特有の引きである「もどせ」を豪快に繰り返し沿道の観衆を楽しませる。

日が暮れ始めるころ、諏訪神社の引き別れとなり 13 屋台は年番の合図で遠い町内から順に 1 台、また 1 台と引きだされて行く。このころから賑やかさのなかにもどこか物悲しさを感じさせる光景となっていく。最後の屋台が境内を出るところには夜空となり、祭りの終わりを惜しむ人たちが屋台の周囲に付き従い、各町内に戻りながら「もどせ」や「練り(数人がスクラムを組み、円陣を作って「ワッショイ、ヨイショ」の掛け声で回る)」を繰り返し、最後のエネルギーを出し尽くして各町へと消えて行く。

c. 二俣まつりの特徴

■もどせ

「もどせ」は文字どおり屋台をバックさせることで、屋台を神社や屋台小屋に納めるときや、連合行動が停滞して前に進むことができないときなどに盛んに行われる。大概は 10 メートル程度を反復して行すが、ときには 200 メートル以上もどす場合や、勢いがつきすぎて走りながらの「もどせ」になってしまう場合もある。反復も 10 数回に及ぶ場合があり、炎天下で非常に体力を必要とするが、

まつりが盛り上がる一番の見せ所である。屋台に群がる若衆に背中を押されながら屋台後方の障害物をかわしていくため、梶取り役と補助役の力量と連携の見せ場ともなっている。



図2-9-41 日没後の屋台



図2-9-42 走りながらの「もどせ」

この「もどせ」は他では見られない二俣まつり特有の引き方であるが、始まりは定かではない。現在のようにハンドル式の梶がなかった戦前でも屋台を戻すことはあったが後方からの引き綱による「もどせ」で、現在のような形ではなかったとされる。戦後にハンドル式の梶が屋台に取り付けられるようになってから後方への進行が容易になり現在のような形に発展していったと考えられている。

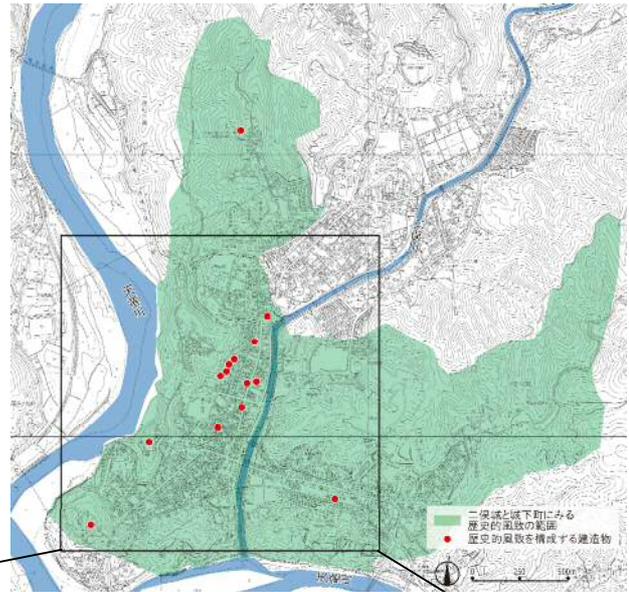


図2-9-43 旧城下町にみる営み(二俣まつり)の範囲

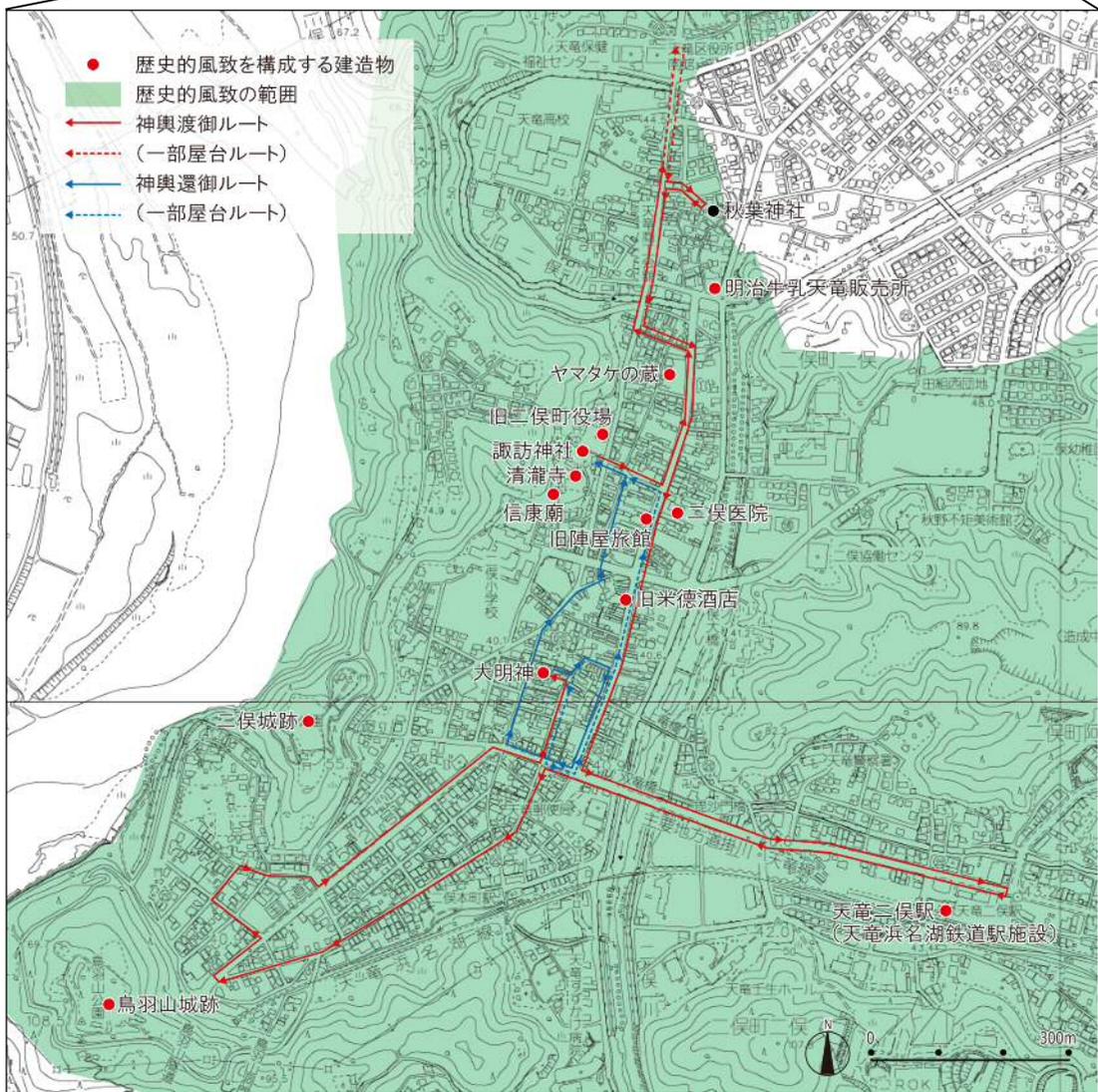


図2-9-44 二俣まつりの神輿・屋台巡行ルート

■二俣まつりのお囃子

二俣まつりのお囃子は「横笛」「大太鼓」「小太鼓」の三種類の楽器で演奏される。「横笛」は一部の町が「能管のうかん」を使う以外は多くが「篠笛しのぶえ」で穴は7穴、3本調子から7本調子が主に使われる。代表的な曲は以下のようなものである。

表2-9-3 二俣まつりの囃子

曲	特徴
馬鹿囃子	二俣祭りで最も多く聴かれる曲で「二俣囃子」とも呼ばれる。勢いのなかにも独特の哀愁が感じられる。導入部の長い抑揚が特徴。
聖天(正伝、昇殿)	神輿の先導を務めるときや宮入りするときに演奏される。二俣まつりの囃子のなかでも格調高く厳かな曲。
四丁目	落語の出囃子などで用いられる馴染みのある曲。リズムカルで気分を高揚させてくれる。
四丁目くずし	通称「チャンチャラ」とも呼ばれ、アップテンポでリズムカルな曲。周囲の市町にも同様の曲が存在するが、多少の違いがある。
屋台下	堂々とした雰囲気曲で、テンポは遅いものの屋台を曳く人を勇気づけてくれる。
新囃子	通称「ザーザー」と呼ばれ、静かで気品が感じられるゆっくりと流れるような曲。橋を渡るときなどに用いられる。
流し	聖天と同様に厳かで、先駆屋台を務める際に新町が演奏する得意の曲で俗に「ヒイカチカ」「ヨツカチ」とも呼ばれている。
狂言鞆鼓 <small>かっこ</small>	新町が能管を用いて演奏する独特の重厚な音色が特徴の曲。

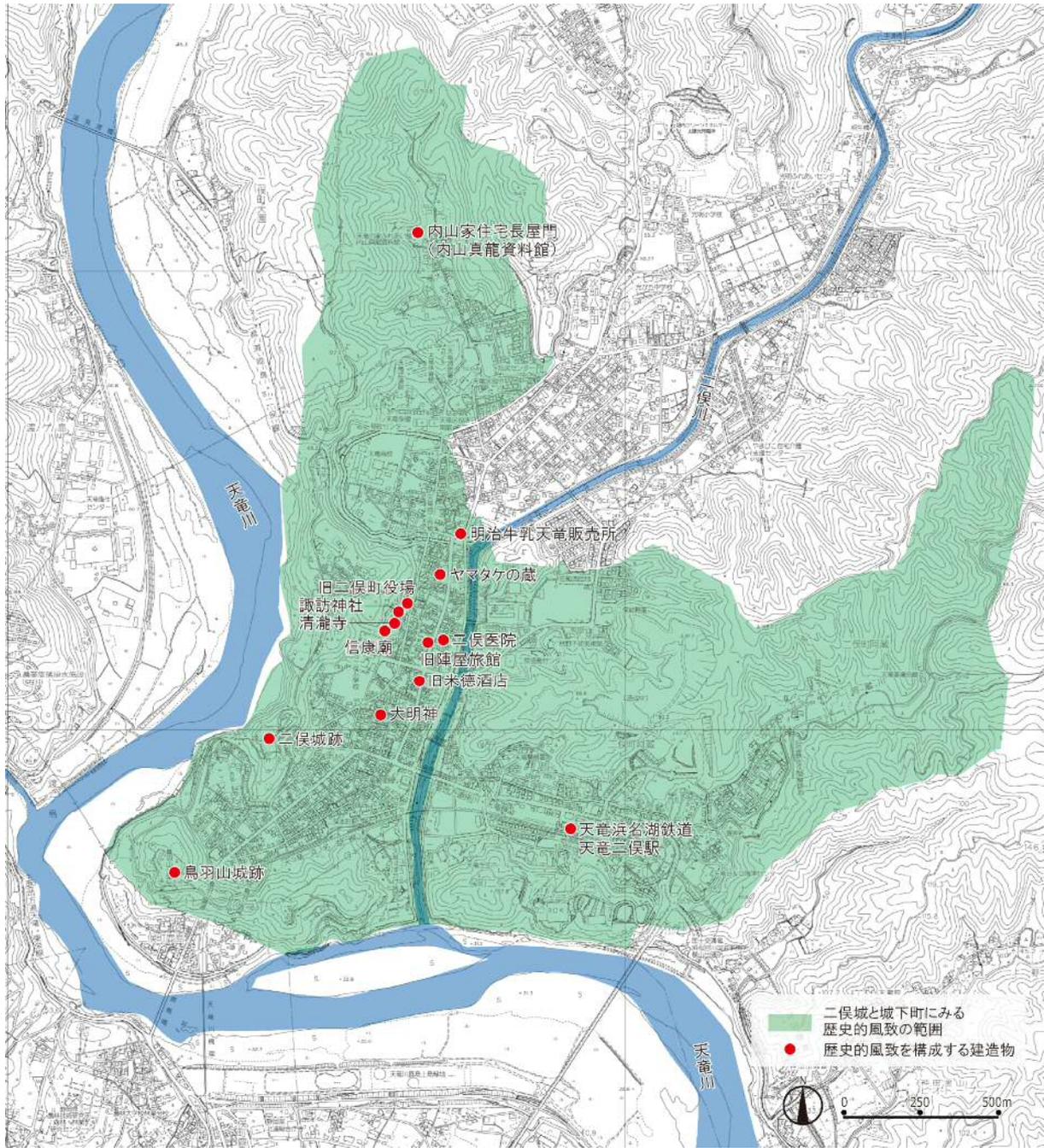


図2-9-45 二俣城と旧城下町にみる歴史的風致の範囲

⑤まとめ

二俣城の城下町であったこの地域では、特に江戸時代から昭和前半までの経済的な繁栄を背景に、地域のシンボルである城跡と社寺、明治・大正・昭和それぞれの時代の特徴的な建築物が混在する、独特なまち並みを形成している。このまち並みを舞台とした祭礼の二俣まつりは、豪華な屋台、多様なお囃子で地域が誇りとする行事として、旧城下町周辺の大谷地域も巻き込み、地域が一体となった大きな盛り上がりを見せるとともに、明治・大正・昭和の時代を駆け抜けてきた歴史を今でも目で見えて感じさせる。その華やかな祭礼がある一方で、二俣城で自刃した信康をしのぶ営みからは、地域が城下町であった歴史を確かに伝え、歴史の積み重なりを感じさせる。

(4)天竜川と椎ヶ脇神社の祭礼にみる歴史的風致

①天竜川と椎ヶ脇神社について

二俣城・鳥羽山城と天竜川を挟んだ西の段丘上には、この地域で最も古い椎ヶ脇神社が鎮座している。椎ヶ脇神社の氏子が居住する地区は二俣町鹿島にあり、天竜川を挟んで城下町側が北鹿島、対岸側が南鹿島(現在の地名上は西鹿島)であり、天竜川を挟みながら一つの地域を形成している。この地区には天竜川を舞台とした数多くの故事・伝説と今に続く人々の営みが残されている。

②天竜川と椎ヶ脇神社の祭礼にみる歴史的風致の建造物

A.椎ヶ脇神社

延暦 20 年(801)坂上田村麻呂が蝦夷征伐に赴く途中、天竜川の洪水で渡れず困っていたところ、土地の者が対岸へ渡したことから水神の祠を勧請したことが起源とされる。『静岡県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—(昭和 54 年(1979)/静岡県教育委員会)』によると、天正 19 年(1591)本殿再興の棟札があるとされ、その年代に相当するものとみられている。「くら おかみのかみ閼淤加美神」を祀る。椎ヶ脇神社の名前の謂われは、古来より「ししが じんじゃ猪家神社」とも呼ばれていたが、それが訛って椎ヶ脇神社とされる一方、神社の北側には、天竜川の深淵があり、その断崖絶壁の上に椎の木があったので椎ヶ淵と呼ばれ、その神社であるから椎ヶ脇神社となったとも伝わる。古来より、椎ヶ脇神社は天竜川での船の安全航行の守り神であり、大氏神として氾濫を抑えるため流域の各地に分霊が祀られてきた。浜松城主堀尾六左衛門光景が、宮奉行中村宗助と代官池田忠左衛門に命じて再建させた本殿が現在のもとのとされる。桁行 1.8 メートル、長さ 3.96 メートル、梁間 2.5 メートル、棟高 5.4 メートル、軒高 2.79 メートルの総檜造り。毎年 1 月に例大祭の「日の出祭」、8 月には夏祭典の「神幸祭」が行われる。



図2-9-46 椎ヶ脇神社

I.旧田代家住宅

江戸時代を通じて天竜川の渡船場や筏の受け継ぎ問屋を営んでいた旧家である。天竜川畔の敷地中央に南面して建つ。木造 2 階建、外壁は杉押縁下見板張りで建築面積 232.63 平方メートル。切妻造瓦葺の三面に下屋を廻らせ、軒は上下階とも出桁造とする。右土間形式で、6 間取の中央列前面に式台を構える。2 階は八畳主体の座敷に床などを備え、



図2-9-47 旧田代家住宅

南面に開放的な縁を通す。舟運による繁栄を伝える大型民家。

田代家は、徳川家康公の遠州経略に協力した功績で、天竜川の筏川下げと諸役免除の特権を与えられたことを機に天竜川の筏問屋経営を始めた。重厚な佇まいの屋敷では天竜川舟運の資料などを展示している。椎ヶ脇神社神幸祭では北鹿島の神輿屋台巡行ルートにあっている。幕末(安政6年(1859))の主屋が国の登録有形文化財として登録されている。

また近年、東側に隣接する鹿島の船宿が田代家の船頭らの休憩施設として建築されたものであることが再評価されている。木造2階建てで1階が帳場や居間、2階が宿泊休憩所に使われたとみられている。



図2-9-48 鹿島の船宿

ウ.鳥羽山洞門

鳥羽山の峠越えを解消するために掘られた隧道。延長約137.8メートル、高さ約3.8メートル、道幅約3.7メートルのレンガ造。『静岡県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書(静岡県教育委員会 2000)』によると、明治32年(1899)に開通し、昭和17年(1942)の鳥羽山隧道の開通によって旧道となった。工事は明治26年(1893)に組織された浜松町外9カ町村組合により行われ、昭和62年(1987)から平成4年(1992)には鋼板による補強工事が行われた。



図2-9-49 鳥羽山洞門

エ.鳥羽山隧道

鉄道(国鉄二俣線)と道路(県道笠井・二俣線)が交差するのを防ぐため鹿島橋と一体で建設された隧道。延長150メートル、幅7メートルの鉄筋コンクリート造三心円型特殊型で有効幅6メートル、高さは5メートル。『静岡県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書(静岡県教育委員会 2000)』によると、昭和15年(1940)に開削工事を開始し、昭和17年(1942)に開通した。



図2-9-50 鳥羽山隧道

オ.鹿島橋

既存の橋(天竜橋：明治 44 年(1911)開通)の老朽化と通行許容量が限界に達したことから架設された長さ 216 メートル、幅 6 メートルの鋼製カンチレバートラス橋。橋脚が 2 ヶ所で橋脚間が 102 メートルと長大で、現存する戦前のトラス橋では最大のスパンを誇る。昭和 10 年(1935)に起工式が挙行され、昭和 12 年(1937)に開通した。銘板には昭和 11 年(1936)・株式会社浅野造船所作と残されている。開通後、天竜橋は解体撤去された。椎ヶ脇神社神幸祭では現在この橋を渡って北鹿島地区に神輿屋台が入っていく。また、鹿島の花火ではこの橋の脇からの花火が見栄えするとして人気撮影ポイントとなっている。



図2-9-51 鹿島橋



図2-9-52 鹿島の花火と鹿島橋

カ.天竜浜名湖鉄道天竜川橋梁

国鉄二俣線の全線開通にあわせて建設された鉄道施設。国の登録有形文化財として昭和 15 年(1940)完成で登録されている。天竜川橋梁は二俣本町駅から南西約 1 キロメートルの天竜川に南北方向に架かり、橋長 403 メートルと天竜浜名湖鉄道のなかでは最も長いトラス橋。北側に支間 62.4 メートルの 3 連トラス橋を架け南側には支間 31.5 メートル、上路鉸桁 6 連と 22.3 メートルの上路鉸桁を接続する。橋台及び橋脚はいずれも鉄筋コンクリート製。西側に架かる鹿島橋と並走する景観は見所で、鹿島の花火と橋梁を通過する車両と共に撮影された写真に人気があり、撮影ポイントとなっている。



図2-9-53 天竜川橋梁

③天竜川と椎ヶ脇神社の祭礼にみる人々の営み

ア.椎ヶ脇神社と鹿島の花火

元は椎ヶ脇神社夏祭典の余興として、明治8年(1845)に始まったとされ、明治11年(1848)に15基の煙筒で花火を打ち上げる静岡県令宛ての祭典願が出されている。昭和33年(1958)までは鹿島地区の若連(鹿島青年会)によって鹿島祭典花火の名で行われ資金難で一時中断したが、昭和49年(1974)から天竜観光協会が引き継いで運営し、現在は椎ヶ脇神社の神幸祭の前週に行われている。

毎年8月の第1週の土曜に行われ、尺玉やスターメイン、仕掛け花火など4,000発の花火が打ち上げられる。打ち上げ数は近年にあっては多いとは言えなくなったが、この花火の特徴は打ち上げ場所の周囲が山に囲まれ大音量の反響に包まれることにあり、1発1発に大きさ以上の迫力を感じることができる。天竜川沿いの堤防から天竜浜名湖鉄道の天竜川橋梁の袂にかけての河川敷はほぼ真上を見上げる位置に上がる距離の近さもあって多くの人々が集まり、花火を楽しむ。花火は鹿島地区の椎ヶ脇神社氏子居住区域(二俣町鹿島周辺)からはどこでも見ることができる。この花火の翌週に椎ヶ脇神社の神幸祭、その翌週に二俣まつりと続く二俣地域が最も賑やかになる季節の到来を告げる風物詩となっている。



図2-9-54 鹿島の花火でのにぎわい



図2-9-55 鹿島の花火



図2-9-56 頭上に上がる鹿島の花火

イ.椎ヶ脇神社の神幸祭(夏祭典)

開始年代は不明ながら、明治11年(1878)に静岡県令へ出された祭典願には初日に渡御と奉納花火、2日目に還御を行う旨が記されている。祭典は8月20日に行われていたが、現在は8月中旬の土日に開催されている。昭和33年(1958)までは旧来の慣例で、猿田彦命を先頭とし、提灯・四神旗を立て神官・総代ほかが続き、神輿を若者が担いで神社参道の階段を降りて地区を流れる天竜川を西鹿島の川原から2隻の屋台船を従え、12灯明が点火後に奉納花火が打上られるなかを北鹿島へ渡して御旅所に一泊、翌日同様に北鹿島から西鹿島へ水上を渡し還御していた。現在、神輿の移動は台車に乗せるようになり、その後に西鹿島または北鹿島の屋台が従っている。天竜川を水上ではなく鹿島橋で渡るようになったが、12灯明と奉納花火打上げも形を変えたが今に残り、御旅所で一夜を過ごすことも同様に行われている。

a.祭の運営

神社祭事の宮司は、江戸時代を通じ世襲神主の大隅家が司ってきたが、明治5年(1872)に

郷社へ列せられてからは、本多家、石神家、内山家、野尻家、青木家、和田家、梅林家が官司として奉仕し、祭りにおいても官司代表として取り仕切る。氏子総代は北鹿島地区と西鹿島地区それぞれから5名と、年番にあたる地区から総代表1名を加えた計11名で構成され、官司と共にまつり運営を行う。神事につき従う白丁は各地区の氏子から若者7名が選ばれる。

b.祭りの様子

■祭典初日

朝8時ごろより官司・氏子総代が集まり始め、祭典の準備が始まる。

昼過ぎ、椎ヶ脇神社境内では官司や氏子総代、各町の白丁が集まり御神体を神輿に乗せる神事がはじまる。御神体を乗せた神輿が白丁に担がれて社殿から山門(随神門)への長い階段を降り始めると、門前では参道の両側に並んだ氏子による太鼓と笛のお囃子「聖天」が鳴り響き、神輿を出迎える。厳かな雰囲気漂わせながら次第に熱気を帯びていくお囃子のなか神輿が引き回しの台車に乗せられ、いよいよ祭り本番となる。

神輿が台車に乗せられるといよいよ神輿の渡御が開始となる。先頭には天狗面をつけた猿田彦命役の白丁(通称：天狗さん)が榊を振る道ひらきを行いながら先頭を歩き、そのすぐうしろを氏子総代が歩く。そのうしろを厳かに神官や白丁に守られた神輿台車の行列が行く。続いて西鹿島の屋台が随行し、西鹿島地区を巡行する。巡行の道中、神輿への参拝者があるたびに天狗さんが手に持つ榊でお祓いし、参拝者は神輿横の賽銭箱に賽銭を入れていく。途中、3カ所で屋台を停留させて休憩を取り、夕方5時過ぎに西鹿島最後の休憩所へ辿りつく手前で屋台が随行から外れ、屋台はその後地区内の引き回しに向かい、神輿台車は休憩所に向かう。休憩所では夕食を挟んで北鹿島の氏子に神輿台車が引継がれる。

引継ぎにより、天狗さんと白丁が北鹿島の氏子に交代し、また天狗さんと氏子総代が先立ち、そのう



図2-9-57 参道脇でのお囃子



図2-9-58 神輿渡御



図2-9-59 お天狗さんによる参拝者のお祓い



図2-9-60 天竜川の鹿島橋を渡る神輿

しろを神官と北鹿島の白丁に囲まれた神輿台車が北鹿島地区を目指して引かれていく。ここでは屋台の随行はなく、西鹿島と北鹿島を結ぶ鹿島橋を渡った先で北鹿島の氏子が引く舟形屋台が出迎える。このころになると日が落ち、屋台には灯りが点くようになる。神輿台車を出迎えた屋台はそのまま随行して北鹿島地区の北端を目指し、天竜川の堤防が築かれる以前は川辺であった旧田代家住宅と鹿島の船宿の前を通っていく。その先にある鳥羽山洞門は狭く高さも低いいため神輿台車に付いたのぼりばた幟旗や提灯が接触してしまう。このため、洞門前で一旦これらを外して慎重に洞門内を抜け、洞門を抜けた先にある北鹿島地区の北端にあたる空き地で小休止をとり、折り返して再び鳥羽山洞門を抜けたところで外した幟旗と提灯を付け直して巡行を続けていく。



図2-9-61 北鹿島の舟形屋台

神輿台車と舟形屋台は次に神幸祭初日の主要祭事である 12 灯明を行うため、北鹿島地区の西にある天竜川堤防を目指して北鹿島地区の中央部を巡行し、鳥羽山隧道南側の国道高架下をくぐって堤防に向かう。堤防に到着すると、12 灯明の開始を待つ地区の氏子がすでに集まっている。神輿台車を堤防わきに止めると、河川敷に準備された 12 灯明が点火され、続いて奉納花火が打ち上げられて神幸祭のクライマックスを迎える。これは、天竜川を船で渡御していた際に上げられていた奉納花火が、鹿島橋を渡るようになった今も続けられているもので、氏子たちが静かに見守るなかで行われる。奉納花火の打ち上げが終わると、北鹿島地区にある御旅所を目指して神輿台車と舟形屋台が出発する。



図2-9-62 12 灯明後の奉納花火

御旅所は鳥居の前から階段になっており、神輿は階段の手前で白丁により台車から降ろされ階段を担ぎ上げられ御旅所に入っていく。神輿が御旅所内に入り、御神体が安着すると神事が執り行われ渡御が完了する。御神体は御旅所で一晩を過ごし、御旅所の階段下では北鹿島の氏子が渡御を祝う余興で盛り上がり夜が更けていく。



図2-9-63 御旅所での神事

■祭典2日目

午前 9 時ごろから還御の準備が氏子総代により行われ、昼過ぎになると御旅所の鳥居前に西鹿島と北鹿島の屋台が到着し、神輿が降りてくる時を待っている。午後 2 時ごろから御旅所内で神事が執り行われ、午後 3 時ごろに鳥居前の台車に神輿が乗せられ還御が始まる。還

御でも天狗さまと氏子総代が先立ち、そのあとに神輿台車の行列が行き、西鹿島の屋台、北鹿島の屋台が随行する。1時間程度かけて椎ヶ脇神社に到着すると再び神輿は台車から降ろされ、白丁に担がれて山門から社殿への階段を上って社殿内に安着し、神事が執り行われて還御が完了する。

c.二俣まつりとの類似と相違

椎ヶ脇神社神幸祭のお囃子は、二俣まつりで使われるお囃子と曲目はほぼ共通しており、使われる場面も似通っているがリズムに相違が感じられる。西鹿島地元での話によると7つの曲目それぞれに変調バージョンがあり、計14種類のお囃子が存在しているという。これらも二俣まつりと重なる部分が多い。

一方で、二俣まつりとは屋台の引き回しに相違があり、引き回し中に「もどせ」のような激しい動きは伴わず、お囃子の調子に合わせて流れるように地区内を巡行していく。これは、椎ヶ脇神社が天竜川の氾濫が鎮まることを祈念して勧請されたことを踏まえていると思われる。また、祭りの全般において、休憩所からの出発時や神事などの節目のときに地区の煙火部による花火が合図としてあがるため、地区のどこであっても祭りの当日であることを感じることができる。

④まとめ

椎ヶ脇神社の氏子が居住する地区である二俣町鹿島は、天竜川を挟んで城下町側と対岸側で一つの地域を形成する特徴から、天竜川と地域が密接に関り、営みに大きく影響している。神輿、屋台の出発する椎ヶ脇神社は地域で最も古く、その由来から天竜川にちなむものであり、神社境内の高台からは鹿島橋や旧田代家住宅、鳥羽山隧道など鹿島の地域を望むことができる。椎ヶ脇神社の祭礼で天竜川を船で渡る際の奉納花火の打ち上げが始まりである鹿島の花火は、天竜川の真上で大輪の花を咲かせ、二俣地域を代表する風物詩として地域の住民に親しまれている。周囲の山に反響する大音量の花火はその迫力だけでなく、天竜川に架かり歴史を感じさせる橋梁などとの印象的なコントラストを見せ、多くの人を集める。

そして、天竜川に架かる鹿島橋を渡って兩岸の地域を屋台が巡行する椎ヶ脇神社の夏祭典「神幸祭」では、印象的な屋台が旧田代家住宅や鳥羽山洞門などを巡り、長く続く祭典の歴史を感じることができる。二俣地域で最も天竜川との関わりの深いと言えるこの地域には、城下町とはまた違う独特の歴史的風致を見ることができる。

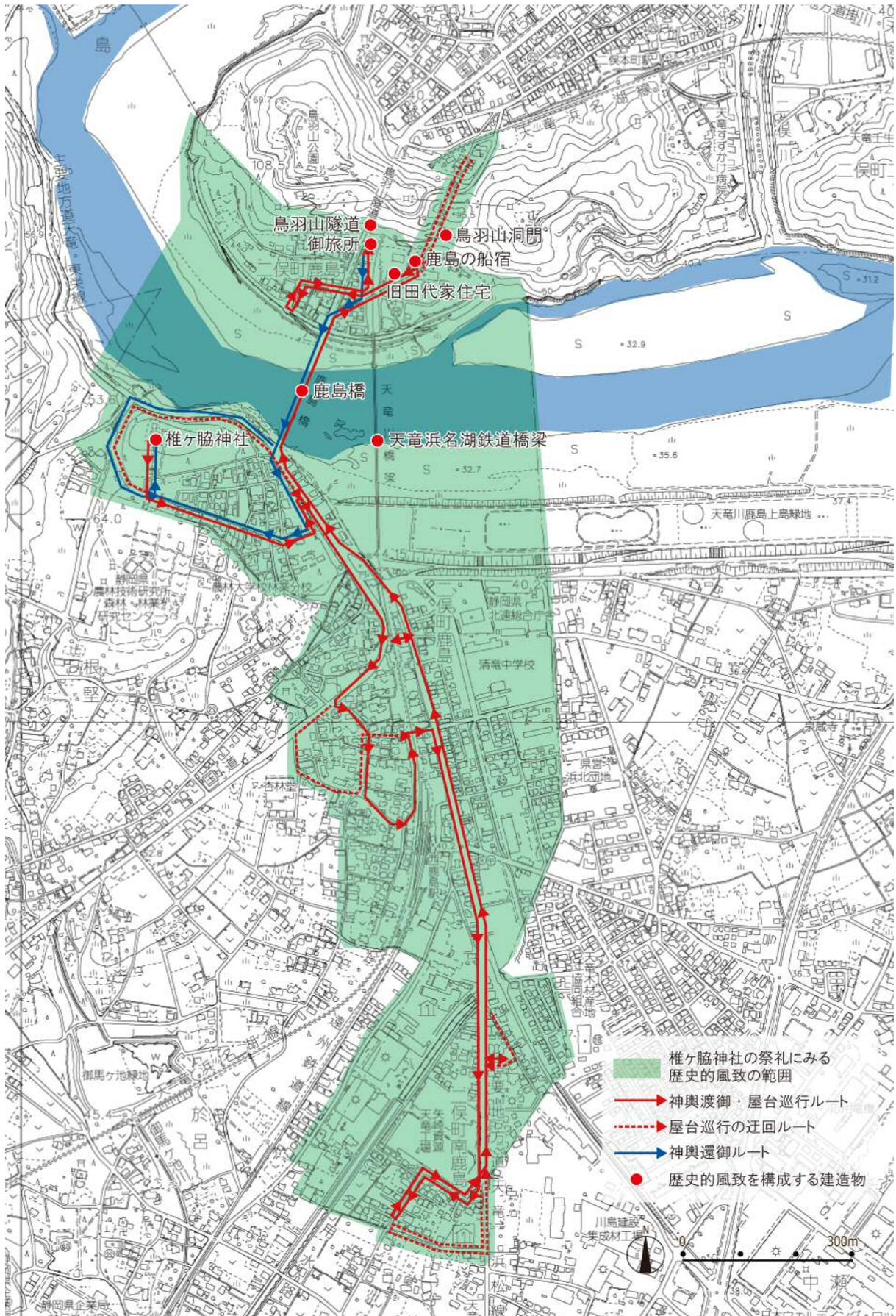


図2-9-64 椎ヶ脇神社神幸祭巡行図と歴史的風致範囲（風致範囲は神幸祭に参加する町の範囲）

第2章 浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致

(5) 光明寺の祭礼にみる歴史的風致

① 光明寺・光明山古墳について

二俣地域は天竜川と秋葉街道という南北交流の動脈をかかえ、古くから政治と経済の中心地として栄えてきた。この二俣地域を北と東から人々が入り出る山東の光明地区は、権力者にとって二俣地域のなかでも特に押さえるべき土地であった。この地区には秋葉山と並び特に近世で信仰を集め、多くの参詣者が訪れた光明寺がある。現在の光明寺は昭和初期に旧光明寺の焼失により移転してきたが、以前は数キロメートル離れた鏡山の山頂にあつて密教修験の霊地であり、五穀の神である虚空蔵菩薩と眷属の笠鋒坊大権現を祭り、中世に起源をもつ儀式を行う寺院であった。近世になると水難除けに御利益があるとして火難除けの秋葉山と並んで参拝者が盛んに訪れ、近世末以降に大黒殿が作られてからは甲子講・光明講・太々講と呼ばれる集団での参詣者が多く訪れるようになり、現在の秋季大祭や初甲子祭での賑わいにも繋がっている。二俣地域及び周辺の街道筋には広範囲にわたって秋葉山、光明山への道筋を標した道標が置かれ、この地を目指し行き交った人々の多さを物語っている。

また現在の光明寺の境内には古墳時代の首長の墳墓とみられる市内最大の前方後円墳である光明山古墳が立地している。光明山古墳は近年の調査で、古代の権力者がこの土地を選んで墳墓を築いたことが明らかとなって注目を集めるようになったが、光明寺の移転時からは光明寺の玄関口の象徴でもあり、今も参詣客が立ち寄る光明寺境内の一部となっている。二俣地域において重要な位置にありながらも中心部とは趣の違った歴史的風致を形成している。

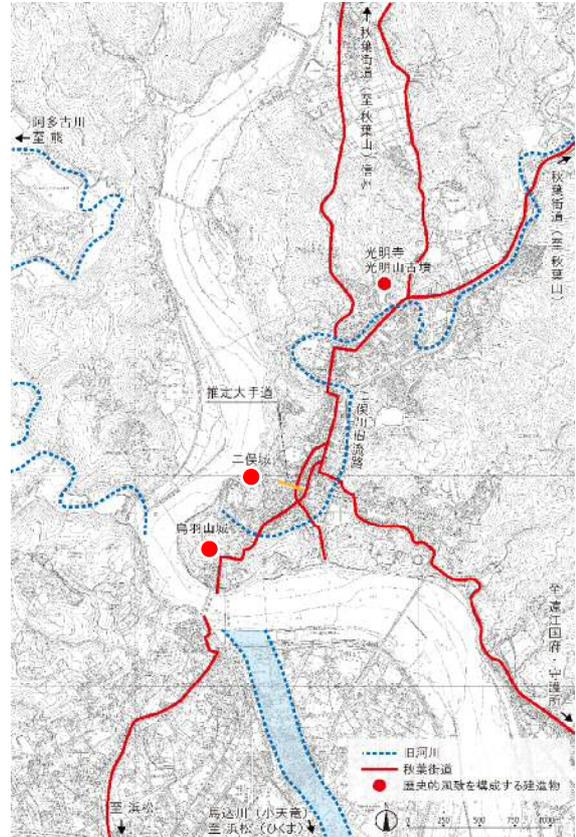


図2-9-65 二俣地域と街道

②光明寺の祭礼にみる歴史的風致を形成する建造物

ア.光明寺

養老元年(717)行基により開創、神亀4年(727)には金光明こんこうみょうきょう経を安置して皇室の祈願寺、国家鎮護の道場となる。古くは真言宗であったが寛文年間曹洞宗に改宗。元は現在の場所から東へ8キロメートルほど離れた鏡山山頂に本堂、大黒殿、権現堂、奥之院などを構えていた。昭和6年(1931)の火災で奥の院を残して焼失、昭和9年(1934)現地に移転、焼失から逃れた奥之院は昭和14年(1939)に現在の場所に移築され、同年の落慶式の写真が残されている。焼失前の光明寺には開山以来の御神木として周囲10.2メートルの大黒杉があったが、火災時に火が入り伐採された。昭和12年(1937)にこの大黒杉から仏師の岡田天孝による一木造りの大黒天が作成され、現在日本最大の大黒天像として安置されている。



図2-9-66 光明寺



図2-9-67 光明寺奥之院

イ.光明山古墳

現在の光明寺境内南側にある市内最大の前方後円墳。平成30年(2018)に浜松市教育委員会が実施した第7～10次の調査をまとめた平成31年(2019)3月の調査報告書によると、築造は古墳時代中期中頃から後半(5世紀中頃から後半)とされ、全長は83メートル、古墳の主軸は南北方向をとり、前方部を南に向けている。後円部、前方部ともに2段築成であり、上段墳丘と下段墳丘の斜面には葺石がみられる。また、下段墳丘の葺石基底部の外側には、高さ25～50センチメートルほどの地山削り出しの基壇が巡っているとみられる。後円部の直径は下段が48メートル、上段が37メートルで高さ8.5メートル(下段墳丘高1.7メートル、上段墳丘高6.8メートル)、前方部は高さ8.3メートル(下段墳丘高2.8メートル、上段墳丘高5.5メートル)で、墳丘斜面の傾斜角は後円部、前方部共に下段墳丘が26～28度、上段墳丘が30～32度となっている。埴輪片はにわへんが豊富に出土



図2-9-68 光明山古墳(航空写真)



図2-9-69 光明山古墳

しており、中段平坦面及び墳頂部には埴輪が樹立されていたとみられる。

二俣地域の北方、遠江南部と信州を結ぶ秋葉街道と奥三河、東遠江に繋がる街道とが重なる交通の要衝を眼下に望む立地にあり、当時の陸上交通網の掌握に大きな役割を担った人物を埋葬した首長墓であったとみられている。昭和30年(1955)に静岡県史跡、令和2年(2020)3月には国の史跡に指定された。光明寺の境内に上がる参拝者を最初に迎える位置にあり、古墳正面に安置されている願成地蔵と併せて参拝の順路となっている。

③光明寺の祭礼にみる営み

現在も光明寺は秋葉神社と浜松市街地をつなぐ秋葉街道(国道152号)沿いにある寺院として、江戸時代から行き交う人々が立寄り、光明寺の火災による移転後も朱印や摩利支天まりしてん、笠鋒坊大権現りほうぼうだいこんげんのお札を求める人々が訪れている。また近年境内の光明山古墳の発掘調査による成果が注目を集めたことでも来訪者を集めている。毎年1月の初甲子祭では、甲子講とよばれる大黒天の御利益を求める人々による江戸時代からの信仰を見ることができ、10月の秋季大祭では故事にちなんだ1280年以上続く七十五膳献供神事により、古代からの厳粛な営みを今も見るができる。

A.光明寺秋季大祭と七十五膳献供神事

光明寺は永く神仏混淆こんぶのままであるため、神事も厳粛に執り行われており、10月最終の土日に行われる例祭でも仏事・神事が行われる。令和元年の例祭は10月26日(土)から10月27日(日)にかけて行われ、祈禱や祈願会、稚児行列、光明山の大天狗と呼ばれる正一位光明笠鋒坊大権現しょういちいこうみょうりほうぼうだいこんげんに七十五膳を献じる神事しちじゅうごぜんけんくしんじ(七十五膳献供神事)が行われ、境内では地域の物産展「天竜楽市」が同時開催され約20店舗が大祭を盛り上げていた。

大祭1日目は午前中に一般祈禱、午後3時ごろから奥之院摩利支天開帳記念の稚児行列が行われた。稚児行列は12年に一度、亥の年に奥之院の摩利支天が開帳されるのに合わせて行われている。日が沈んだ午後7時ごろから奉納された提灯を並べ祈禱する万灯祈願会が行われ、午後9時ごろからは例祭のクライマックスとなる七十五膳献供神事しちじゅうごぜんけんくしんじが執り

行われる。寺の由来書によると七十五膳献供神事しちじゅうごぜんけんくしんじは天平9年(737)に遠江国司であった草壁王子(皇族の草壁皇子とは別人)が天竜川の大蛇を退治するため、光明山の笠鋒坊大権現に七



図2-9-70 光明寺秋季大祭



図2-9-71 光明寺万灯祈願会

十五膳を献じて満願成就したという故事に由来し 1280 年以上続いているとされる。寺には昭和初期に神事の作法を記した文書と寺の年表が残っており、少なくともそのころからは現在の形式であることが確認できる。神事は光明寺の僧と地域の代表である世話人と七十五膳しちじゅうごぜんを運ぶ地域の若者(若衆)が 10 数名、白装束で本殿に集まり始められる。神事そのものは秘儀であるが、周囲では一般の参拝者が本殿での神事を外から静かに見守る。本殿での神事が終わると七十五の膳は長持ながもちに納められ、明かりが消された境内を抜け、若衆によって本殿裏の光明山中腹にある奥之院へ運ばれる。奥之院での神事が終わると神酒を飲み、本殿に戻って生姜、すりゴマ、椎茸、人参の入った祝麵のうどんを食して解散する。

大祭 2 日目は午前一般祈禱、午後最後の祈禱である満散祈禱が行われ、午後 3 時ごろに投げ餅を行って大祭が終了となる。大祭は現在の場所に移って間もない昭和 10 年(1935)の光明山典座寮の『釜入日鑑』には、10 月 26 日から 3 日間の大祭で 587 人分の食事が用意された記録が残されており、大火直後からも変わらず大祭が行われてきたことが分かる。

イ.初甲子祭

元は毎年最初の甲子の日に行われていた初甲子祭はつきのえねさいは、現在 1 月第 3 週の日曜日に開催されている。初甲子祭は寺の僧と総代、地域の世話人により執り行われ、当日は天竜楽市の屋台がたつ。大黒殿で祈禱を受けることのできる午前 10 時ごろから午後 3 時ごろまで参拝者が訪れ境内は賑わいをみせる。参拝は世話人や檀家、二俣地域を中心に市外からも訪れる。

参拝者は麓から坂を上り境内に入ると光明山古墳に迎えられ、古墳正面の階段を上って大黒殿に向かう。大黒殿では日に 5 回大祈禱が行われ、祈禱を受けた参拝者には祝膳の弁当が振る舞われる。社務所では世話人が受付を務め、祈禱や縁起物を買求める参拝者への対応を担っている。

近代以降、光明寺には甲子講・太々講・光明講と呼ばれる光明寺への参拝のための講が周辺各地で組織され、寄進や代参も盛んであった。特に交易の拠点で栄えていた二俣地域の甲子講・光明講の組織である「二俣講」は、経済的な繁栄を背景に多くの寄進を行った。門前の石造物などでその形跡を見ることができる。昭和 10 年(1935)の『釜入日鑑』には一年を通して多くの太々講・光明講の参拝者が光明寺の宿坊で食事をしてきた記録が残されており、この年の初甲子祭では参拝客、世話人などに 175 膳を給している。これらは以前ほどではないものの現在も代参が行われおり、光明寺には毎年代参者の記帳が残されている。



図2-9-72 光明寺初甲子祭



図2-9-73 大黒殿での祈禱



図2-9-74 受付(世話人)と参拝者

ウ.光明寺の総代と世話人

光明寺で行われる諸行事は、その多くが地域の総代、世話人と呼ばれる人々の協力によって支えられている。総代、世話人は麓の旧光明村地区、現在の地名で山東や横川という地区の人々で、令和3年(2021)時点では総代3名、世話人24名で組織されている。

総代は祭事の補助を、世話人は、秋季大祭と初甲子祭の手伝いを中心に、祭事に合わせた境内の清掃活動(年4回程度)や境内の草刈り(年2回程度)、祭事で振舞われる御膳やうどんの調理などを行っている。祭事の準備にはおよそ3日かかり、調理も世話人の女性6~7人がほぼ一日かけて行っている。中には親子3代に渡って調理の手伝いに来ているという世話人もいる。また、世話人は毎年1月4日に光明寺で新年会も行っている。昭和10年(1935)の『釜入日鑑』にも度々「総代」「世話人」の参拝や寺での食事を取った記述が見られ、このころには現在と同様の活動が行われていたことが伺える。

境内の清掃・草刈りは本殿、大黒殿、奥之院周囲をはじめ、南側の光明山古墳の周囲も行っている。特に光明山古墳の側に安置されている願成地蔵尊は、元は旧光明村のある場所に埋まっていたものが掘り起こされ、住民たつての願いから古墳の脇に安置された経緯もあり、参拝者を最初に迎える古墳と地蔵周囲の良好な環境が維持されるよう欠かさずに行われている。



図2-9-75 準備の様子(初甲子祭)



図2-9-76 調理の様子(初甲子祭)



図2-9-77 社務所の様子



図2-9-78 光明寺の祭礼にみる歴史的風致の範囲

④まとめ

二俣地域の中心地である城下町が、主に近世から発展していった歴史と営みを見せる一方で、光明寺の境内で見られる営みは、近世以前から伝わる秋季大祭や初甲子祭などの祭礼が火災消失による移転後も変わらぬ世話人や総代といった祭礼を支える人々の営みにより守り伝えられ、多くの参拝客を迎えている。また、秋季大祭の夜に行われ、中世から伝わる信仰の厳かな営みを今に伝えるしちじゅうごぜんけんくしんじ七十五膳献供神事が、境内で唯一消失を免れた奥之院で地域の世話人や若者たちと行われる様子は、光明寺の信仰が地域と一体となって長く守り伝えられてきた歴史を感じさせる。

また、この光明寺の境内に天竜川流域で屈指の規模の前方後円墳が築かれていることは、古代から中世にかけてもこの地が二俣地域のなかでも重要な場所であったことを今に伝えるものであり、光明寺境内と一体となった古墳の景観と、この景観を維持するために光明寺と地域の人々が守り伝えるために続けてきた営みは、二俣の地域のなかでも独特の厳かな雰囲気と温かさを感じさせる。

(6) まとめ

このように、古代から遠州地方と信州、三河へも繋がる交通の要所であった二俣の地は、近世に徳川家康と武田信玄という有名武将が覇権をかけて最重要地として争って以降、二俣城が廃城になり、時代と共に城下町としての痕跡は残りつつも営みは往時とは変わってきた。それでも交通・交易の要所であったという歴史的な背景は地域の住民に今も誇りとして残っており、ふたまた二俣まつりではその誇りを示すかのように勇壮な屋台引きと華やかなお囃子で城下町であった雰囲気が街中に満ち溢れる一方、偉人の慰霊や顕彰、信仰の営みもまた今に伝えられている。近年、この地域のシンボルである二俣城跡及び鳥羽山城跡が国の史跡に指定され、人々の営みに活気を与えている。また、城下町北側の入り口にあたる光明山古墳も昨年史跡に指定された。ここ数年の調査により古代から相当な有力者がこの地を支配していたと見られることが分かり、これまで以上にその価値に注目が集まっている。

今、浜松市内外からこの地の歴史に注目が集まり、この歴史を後世へ繋げて行こうという機運が住民に広がり盛り上がりを見せている。この盛り上がりを受け、新たな地域遺産を掘り起こす活動の活発化は、ここに住まう人々の気質や信仰とも結びつき文化となっているとも言える。こうした営みは諏訪神社、椎ヶ脇神社、清瀧寺、光明寺といった神社仏閣や、近世から近代にかけての経済的繁栄を背景とした江戸時代、明治期、大正期、昭和期それぞれの特徴的な建造物が残る旧城下町周辺のまち並みを舞台に、若しくは、二俣城跡及び鳥羽山城跡、光明山古墳などの史跡といった営みに関係する建造物のあるまち並みを背景に行われ、多様多彩な町の景観と一体となって良好な環境を形成しており、守り伝えていきたい歴史的風致である。

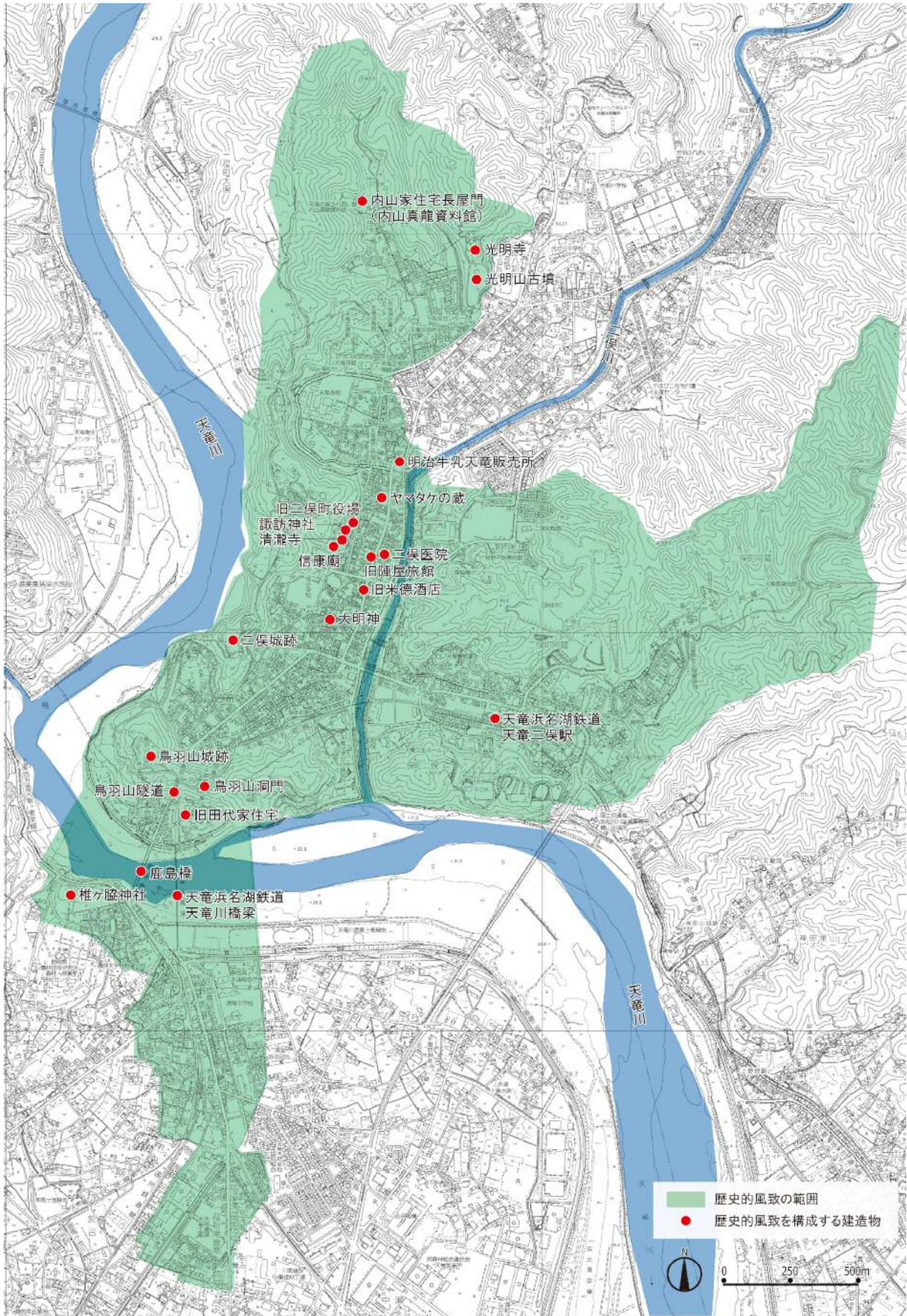


図2-9-79 二俣地域の営みにみる歴史的風致の範囲

二俣川と天竜川にまつわる話

二俣川と天竜川の治水

かつて二俣地域を蛇行して流れていた二俣川は、寛政年代(1789-1800)以前は、現在と異なり城下町を北側から南に向かって流れた後、南側にある鳥羽山の山裾に沿って西に折れ現在の川口という地名の場所で天竜川と合流していた。このため、洪水がおこると水位の関係で天竜川の水が逆流して二俣川の氾濫を招き、しばしば大きな被害をもたらしていた。この水害から逃れるため現在の流路に付け替える大工事が行われて水害を防がれるようになり、二俣の繁栄の礎が築かれてきた。付け替え工事は長年にわたって行われ、二俣村名主の袴田喜長の私財投入と陣頭指揮による城下町南側の鳥羽山を堀割る工事で流路を変更し、その後も遺志を継いで昭和まで付け替えの工事が続けられ水害を大きく減じてきた。鳥羽山を堀割って天竜川に落とす現在の流路は現地を立てばその難工事が推し量られ、私財を投じて工事の陣頭指揮した袴田喜長が長く顕彰されている意味がわかる。

川にまつわる伝説・伝承

二俣地域の成り立ちに大きな影響を与えた天竜川と二俣川は、諏訪神社の創始が諏訪大社(長野県)から流された「ほこら」が、天竜川の増水時に二俣川を逆流してきた水の流れに乗り当地に流れ着いたことに由来するとされる伝承や、椎ヶ脇神社にまつわる「袖仕ヶ浦由来記」の坂上田村麻呂と赤蛇の伝説など、地域に様々な伝説・伝承を残している。

本文でも触れた光明寺の七十五膳献供神事の始まりに関する大蛇退治の故事、椎ヶ脇神社の神主が登場する椀貸伝説の「椎ヶ脇淵の竜宮」、病に苦しむ人たちが借用証文を作って水神様に上げ、期限が切れても金を返さず抵当にしている証文に書き入れた病気を取り上げてもらうというユニークな「金貸水神」の伝説などがある。大蛇(竜)や水神にちなんだ話が多いのは、いかにも河川とともに地域の歴史を重ねてきた当地らしく、これらは地域の人々によって語り伝えられ、収集されたものが冊子として発刊されるなどしている。

川にまつわる伝説・伝承は単なる昔ばなしではなく、災害の記録(記憶)を残すための伝承として研究の対象となるものもあり、いつかこれらの伝説・伝承から歴史上の発見がされる日がくるのかもしれない。



図2-9-80 二俣川と天竜川



図2-9-81 鳥羽山の堀割を流れる現在の二俣川



図2-9-82 旧二俣川と天竜川の合流箇所(現在の川口堤防)



図2-9-83 昭和10年(1935)の付け替え工事で生まれた二光の滝

第 2 章

浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致